

あなたの「気になる橋」をお寄せください。

読者の皆さまの気になる橋をご紹介します。ご当地自慢の橋、その橋にまつわるエピソード、橋の疑問などなど、橋にまつわる事なら大歓迎です。

宛先

〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-5-16 パームコート1F NPO人と道研究会 編集制作室 宛

現在の「松江大橋」は、1937(昭和12)年に架けられた17代目で、全長134mのゲルバー式鋼鉄桁橋の構造を持っています。下部の基礎工事には、日本では始めて潜函工法が採用されました(17代目は橋年齢73歳)



水の都として知られる城下町・松江。市を

### 松江大橋 道の駅「秋鹿なぎさ公園」から約13km

島根県松江市

島根県松江市

# 橋がつなく みんなの未来

Bridges bring our brighter future. vol.11

## 新シリーズ 道の駅と日本の橋 ①

地域と地域、人と人をつなぐ橋には、さまざまな歴史やドラマがあります。地域と人の集う拠点、道の駅にも近い日本の橋を紹介しましょう。



磐越西線喜多方・山都間の阿賀野川水系一ノ戸川に架かる16支間、全長445m、高さ24mの鉄橋。愛称「山都の鉄橋」。1908(明治41)年に架橋されました(橋年齢102歳)

そのレトロな外観から、鉄道ファンばかりならず、非電化区間のため展望を妨げる架線柱のない絶好の撮影場所として、S.L.C.ばんえつ物語号」走行時にはたくさんの「撮り鉄」が詰めかけます。川のせせらぎをバックに走る列車走行音は、「つづくしまの音30景」に選定され、ライトアップされる期間もあります。

そのレトロな外観から、鉄道ファンばかりならず、非電化区間のため展望を妨げる架線柱のない絶好の撮影場所として、S.L.C.ばんえつ物語号」走行時にはたくさんの「撮り鉄」が詰めかけます。

### 一ノ戸川橋梁 道の駅「にしあいず」から約20km

福島県喜多方市

製の200フィート(62.408m)の標準ボルチモアトラスで、明治から大正初めごろまでは長大橋として盛んに使われましたが、その後の

### 河津七滝ループ橋

静岡県河津町

道の駅「天城越え」から約7km

伊豆半島の中心を南北に縦断する国道414号線。古くから「天城越え」の難所として知られ、この橋が架かる七滝・大滝温泉付近も国道が山に沿ったつづら折れで、土砂崩れなどの交通災害が懸念されてきました。下田市側からは反時計回りの上り坂、天城計回りの上り坂、天城湯ヶ島町側からはその逆で、安全のため速度は30kmに制限されています。でも、その分ゆくりと遊園地なみの2回転パノラマが楽しめるというわけです。



全長1064m、高さ45m、直径80mの二重ループ橋で、正式名は七滝高架橋。なだるなつづらきよ。6基の橋脚によりループ橋(上部工)を支えています。ループ橋部分は3径間連続曲線箱桁4連で構成。(橋年齢32歳)

の上で段々大きくなってゆく。その大橋川の下駄の音は、一度聞いたら忘れることができな。大舞踏会のように、テンポの速い陽気な音楽に聞こえる」とつづった一文は有名で、この橋上を歩く人々と呼ばれていました。橋中央の両サイドには川にせり出した展望台があり、宍道湖や大橋川兩岸の町並み、行き交う船などを眺め、水都情緒を堪能することができます。

初代の橋は、江戸時代初期の1608(慶長13)年、松江藩初代藩主、堀尾吉晴公が、松江城を築く大量の資材を馬や荷車で運び込むために大橋を造ったといわれています。欄干は御影石でできていますが、水の都・松江の名を国際的に広めたい。中でも、「下駄のかしませい音が、橋



のです。後にその橋脚は「源助柱」と呼ばれるようになりました。そして、この橋が次に架け替える話が立ちおこったときには、橋を渡る人が激減したという話も記されています。この源助柱の伝説は現代にまで続きます。第15代大橋の完成の前年、1890(明治23)年に強度試験で石を載せたところ、源助柱付近の中央の鉄柱が約1mも沈んで欄干が崩れかかりました。現在架かっている大橋も完成前年の1936(昭和11)年に、橋脚下にいた深田清技師に鋼鉄製の容器が落下して死亡しました。この悲劇を「痛ましい昭和の源助柱」と、当時の新聞が報じています。

### パワースポット? 松江大橋 人柱が支え続けたという話

### 橋のコラム

この話を信じますか?

「...そこで村人たちは、荒れ狂う洪水の霊を鎮めようと、人柱を立てることにした。川の流れがもっとも激しくなる真ん中の橋脚が立つ川底に、生きたまま人を埋めたのである。それからというもの、三百年もの間、その橋はびくりともしななかったという。その人柱となったのは、源助という男であった。...」(ラフカディオ・ハーン「新編・日本の面影」より) そして月のない日の真夜中、源助が埋められたという柱のあたりに赤い火の玉がちらつくというのです。源助は、「襦袢(まじ)のついていない袴をはいて橋を渡った最初の男を橋の下に埋める」というお上の決まりで人柱にされた



旅人 橋之助